

● 10月選評

小島なお

新月は

英語もちゃんと new moon

ひとりのために米を買い足す

...

汐見りら

名前も存在も不確かなもの。けれど、頭上にあるはずのそれを新月と呼び new moon と呼ぶ。人から見えなくとも、月も、私の生活もそこに息づいている。

ときどきは鉄琴みたいな夜だから

調律師

あなたにまかせたい

...

石井 友禅

張り詰めた空間がきん、と鳴るような、私の心が共鳴しているような硬質な夜。あなたの柔らかい繊細な手で心地よく適切な私のための夜を調律してほしい。

お億年 伝えたかっただけ

なのにどうしてきみに桜の絵文字

...

互井宇宙論

地球誕生の日から今日まで、無数の私は無数のあなたにただひとつの思いを伝えようとしてきた。それなのに、また違う声、言葉、絵文字で伝えそびれる。

りんどうの紫ふれる指がまだ母語

...

かち

古くから日本で生薬として用いられ、その苦味から竜胆と名づけられた。まだ母語だけの指は、その紫に触れ、あたらしい言語、世界を獲得してゆく。

モンブラン崩せば口は大聖堂

青木菓子

栗のクリームを螺旋状に絞りあげ、アルプスの美しい山脈を模したその形状の繊細な雄大さ。山岳信仰と四季の賜物と人為の芸術と。大聖堂が崩れるように。

ともだちになったのに

かわをながれてくあなたたちを

なんどみおくっただろう

なみなみ

笹舟も灯籠もみな川を鮮やかに彩りながら流れ去ってしまう。水のように私の生涯にしなやかに添い、ひとときの眩しい景を見せて去ってゆくともだち。

耳だもの瞼はなくて

この穴も疾走の風の

出し入れをする

金井晶

眠るとき、祈るとき、見たくないとき、目は瞼を閉じる。耳はできない。開いたままの穴を行き来するこの世の音を受け入れつついつか瞼を持てますように。

戦前はこういう貌をしているの

ネイルにふかい赤をえらんで

夏山 葉

戦後しか知らない私たちにとって、戦前の貌も身体もわからない。しかし指先の赤が私にとっての文脈を持つように、戦前と戦後はきつと似た貌をしている。

ティーバックをよじれた糸が回して  
指に伝わるあの世の感じ

：

林 淳

滴るほど湯を含んだティーバッグを引き上げるときの重み。重心の不安定な質量に揺れるあの感覚は、蜘蛛の糸のようなのかな不気味を引き寄せる。

この世よりうつくしい場所  
知らなくて

グレープフルーツ横に切る夜

：

小川 未夜子

この世しか知らないのだから、必然的にこの世が一番うつくしい場所になる。刃をどこから入れても同じ断面が現れるように、ひとときの生の香気に飲びながら。